

SEEDS

No.248 冬号
2021 /

知床横断道路40周年
52.9.4

知床横断道路40周年

特集



活動紹介

「ホロベツ」から考える知床国立公園

活動紹介コラム

知床オータムフェス 2020

第4回 スタッフの彩色 ～いろいろ～

「ホロボツ」から考える知床国立公園 「知床オータムバスデイズ」の実施を通して



2020年、知床は世界自然遺産に指定されてから15周年を迎えました。この間、国立公園の利用と保全の取り組みは大きく前進しましたが、観光利用については課題が残されています。

例えば夏の繁忙期、知床国立公園内の一大観光地「知床五湖」に続く道路では、入園待ちの車で大渋滞が起きています。また、羅臼岳登山口（＝岩尾別温泉）へと向かう蛇行したせまい道は路線バスが運行しておらず、登山者用の駐車スペースもほとんどないことから路肩駐車が多くみられ、通行の妨げになっています。さらに、秋になればサケマスを狙ってやってくるヒグマを一目見たい、写真を撮りたい、という観光客が道路上に滞留して大渋滞が起きることもしばしばです。時には車から降りてヒグマに近づく人もいます。このような道路上で起きる問題は、毎年繰り返し発生し、いまだ解決されないまま今日に至ります。

そこで試みたのが、今回の「知床オータムバスデイズ」です。2020年10月2日から3日

間、知床自然センターから先はバスに乗り換えて国立公園を楽しむシステムを試行しました。バスには、地元のネイチャーガイドが乗車して国立公園の魅力を紹介し、バスの乗り換え場所ではイベントを開催しました。公園利用の新たな魅力の発掘や底上げ、さらには既存の課題解決を視野に入れた秋の取り組みを、今回は皆様にご紹介します。

ゲートとしての役割

ホロボツという場所は、知床国立公園の入口に位置します。知床自然センターは、いわばゲートとしての役割を担うために斜里町によって設置されたビジターセンターです。

元来ビジターセンターは、国立公園の楽しみ方やその魅力を伝えるための施設として全国の国立公園に設置されており、来園者に最初に立ち寄ってほしい施設です。しかし多くの人は「国立公園に来た」という意識も持たないまま、そのような施設には目もくれず、

お目当ての観光スポットへと直行してしまうようです。

そういった人たちに当たり前のように施設に立ち寄ってもらうにはどうしたらよいか。これが「ゲート」機能を発揮するためのひとつの課題です。

マイカーの乗り換えという手法は、足を止めるための一つのツールとして活用できます。マイカーを一度降りる場所に施設があれば、観光客が立ち寄ってくれる可能性も高まります。

移動をサービスに

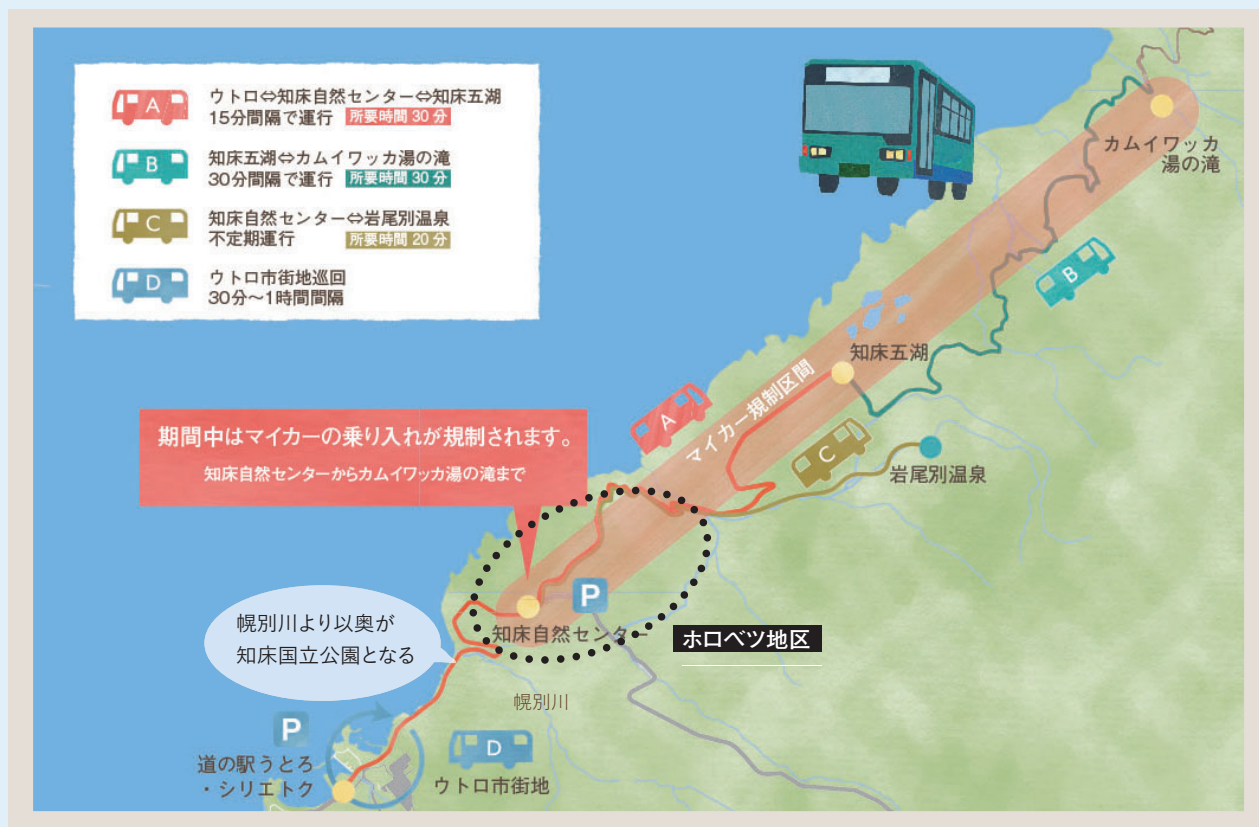
そもそも知床の一部では1997年から、夏のハイシーズンに限りマイカー規制＝シャトルバスシステムが導入されてきまし

た。しかし、知床五湖まではマイカーで入れるのに現地ではシャトルバスへの乗り換えはできないなど、わかりづらさもありました。また、単なる輸送手段になりがちで今一步、付加価値をつけられずにいました。

そこで考えたのが「移動をサービスに。」というコンセプトのシャトルバスシステムです。いわば積極的な乗り換えシステム、攻めのマイカー規制といえるでしょう。

知床自然センターから先は全てバス（一部の許可車両を除く）のみの通行としたため、知床五湖やカムイワッカに行く人たちは必ず一旦、自然センターに止まります。このタイミングをうまく活用すれば、国立公園のルールや楽しみ方を伝え、ゲート機能を発揮することができます。

また、バスの乗車体験そのものが楽しく、さらなる知床の魅力を発見できる仕掛けがあれば、多少不便で、さらにはお金がかかって、そのサービスに価値を見出し、バス利用をあえて選び、楽しんでもらえるのではないのでしょうか。



マイカー規制等の事業は地域の関係者で組織された協議会が主体となり実施しています。本事業は環境省による「国立・国定公園への誘客の推進事業費」の交付を受けて実施しました。



いく度も関係者・地元との協議を重ね実施に至った



バスデイズ前日の夜にホロボツゲートを閉める職員。この区間からのマイカー規制は史上初のこと。

◎登山者の輸送について不十分。
◎ガイドが解説するにはバスの速度が速すぎる。
◎ウトロ市街地の巡回バスは、乗り換えが多くて不便。
◎今後の収支経営

細かい意見もたくさん挙がった中、「そもそもこれまで追い払い続けてきたヒグマを観光資源と

課題は山積み

実施前から想定していた課題はもちろん、実際にやってみたらこそ見えた課題もたくさんありました。
みよう」という意見が上がり、事業が動き出したのです。
知床国立公園の新たな利用システムを考えるとき、一番肝心なのは地域と一緒に同じ方向を向いて実施できるかどうかです。知床に訪れる人々を迎え入れ、もてなしている最前線は地域の人々だからです。

ホロボツから先の魅力

ホロボツ地区から先には人気スポット「知床五湖」が君臨していますが、ほかにも魅力的な場所があります。たとえば、羅臼岳登山口へと続く岩尾別温泉道路沿いでは、秋になればすばらしい紅葉を堪能することができます。今回のバスデイズで新たに企画した岩尾別川河口にある「岩尾別ふ化場」の見学や、かつての開拓の歴史の解説、道路沿いでの野生動物観察なども知床国立公園の魅力のひとつとして取り上げることができます。

岩尾別ふ化場でシロザケの解説を聞くツアー参加者



シャトルバスの中で知床の動物や歴史を解説する地元ネイチャーガイド



ウトロ市街地との連携

シャトルバスシステムを運用するうえでの課題の一つに、駐車場の収容力が挙げられます。知床自然センターでは最大でも230台が限界で、ピーク時などは到底足りません。

そこで重要なのが、ウトロの道の駅や大型ホテルなど市街地エリアとの連携です。市街地での乗り換えを促進することで、地域全体の駐車台数の収容力を大きくすることができま。さらには、来訪者が市街地にも滞在するきっかけとなり、飲食店やお土産販売店など地域全体の利益が上がる仕組みづくりにつながることが期待できます。

実施にたどり着くまでの道筋

当初、この企画アイデアを地元の関係者に説明して回っていた時は、今年の実施は難しいかもしれないと感じていました。賛成の意見もあった一方で「ただでさえコ

して扱うのか否かという議論が必要」という知床にとって根源的な課題も浮き彫りになりました。知床において観光と保全を両立し続けていくためにも、これは避けては通れない大きな宿題です。何もやらなければ表に出てこなかった意見が、今回の試行をきっかけに地域の皆さんからあふれ出しました。

これらの問題と一つ一つ真摯に向き合うことは、ポストコロナを見据えた知床観光を前に進めていく力に変わるものと思います。地域の人たちや観光関係者の方々と今後も膝を突き合わせて語り合う場が必要、と改めて考えさせられました。

ここからスタートするために

今回の取り組みは三十数年前からあたためられてきた構想のはじめの一步です。見えてきた課題もたくさんありましたが、少なくともまずは実施したことでこのような利用システムの具体例を示すこ



ウトロ市街地での乗り換え促進に「シーニックマルシェ」が大活躍

ロナで客が激減しているのに、規制をすることでさらに減ることにならないか」「業務車両はどうなるのか」「輸送量は足りるのか」等々、それぞれの立場から不安の声がいくつも挙がったからです。

心配はごもっともです。何度も事務局内で話し合いを繰り返して、地域が不安に思っていることを極力取り除いていく道を探りました。そして、改めて地域関係者を含む会議の場で実施の可否を諮ったところ、「不安がすべて払拭された訳ではないが、とにかくやって

とができたと思います。

知床という地域の価値をどう高め維持していくのか、その方法論は様々な立場の人たちの意見が集まって、初めて見えてくるものと思っています。今回の試行はそれを議題としてテーブルに上げるためのきっかけのひとつに過ぎないのです。

12月に行われた第14回カムイワッカ部会(※)では、今回の取り組みを3年程度継続することが決まりました。

今回の実績をたたき台にして来年、再来年と課題と向き合い続け、10年先には利用と保全の両輪が好循環で高め合う世界自然遺産知床らしい、国立公園のシステムに発展していることを目指したいと思います。